

# 「役に立つものとは何か」

～神様のところへ帰ろう～

マタイ25：14～30

大雨が降って大きな虹が出ました。それを見た裕福な家の子どもが、「これは何のCMか。」と聞きました。この子は塾と学校しか行き来していなかったの、虹はCMでしか見たことがなかったのです。また裕福でない家の子どもは、大雨で家が雨漏りをして、お母さんがお皿や鍋を雨受けに使っている姿を見て、涙目になりながら「ぼくが大きくなったらバケツをいっぱい買ってあげるから。」と言いました。物事の見方は、置かれた状況でこれほど変わってくるものなのです。貧しいからといって心が豊かというわけではなく、豊かだからといって心が豊かなわけではありません。私たちの視線が間違った方向に進んで行くこともあるし、誰かのためにがんばるんだと思える生き方もあるのです。私たちがどのように進むことができるか考えていきましょう。

マタイの25章14節 タラントの例えです。これはイエス様の「忠実なる者」という遺言が記されています。その前後に、イエス様はさまざまな例え話を挙げていますが、その最後に主人が旅に出るのでしょべにお金を任せるといふたとえ話を挙げています。1タラントとは6000日分の賃金ですから、大金を任せたといいことです。みなさんは大金を人に任せるときには、信頼がないとできないでしょう。5タラント預かった人や2タラント預かった人は命がけで働き、倍にして返しました。1タラント預かった人は、取られないように土の中に埋めました。そして主人をのり、自分の立場を危うくしてしまいます。人は汚い心を持っています。自分に非が向くと言い訳をしてしまいます。神様はお金を儲けてきたことを評価したわけではありません。主人に対する思いを持っているかということです。その主人が好きだから主人のためにがんばろうと思って二人は行動しましたが、1タラント預かった人は主人に対する思いが自分の思いに負けていき、喜ばなくなり、一つ一つの働きが形になっていきました。このたとえ話には、持っている物を埋める（否定する）こととあなたの心の忠誠心と、二つのことを言っているのです。「忠誠心」とは何でしょうか。2人は評価されるためにしたのではなく主人が好きだったから儲けてきたのです。たとえ失敗したとしても主人は怒らなかつたでしょう。

## 役に立つものとは何か ～神様のところへ帰ろう～

聖書でいう罪とは、的を外すということです。最初のずれは1mm程度です。しかし長い時間が経つとそのずれはどんなに大きくなるでしょう。この3人は最初からそんなに大きな違いはありませんでした。5タラントや2タラント預かった人も少しずつでは戻りを繰り返していたと思われまふ。神様の言われる役に立つものとは何でしょうか。正義は自分に向けるものであり、人に向けるものではありません。やらなければならないことは最善を尽くす行為です。最善をつかむことが聖書で言う心であり、賜物を用いる行為です。神様は愛する力を与えてくれました。これが最大の賜物です。そしてその賜物はさまざまな現われで出て行きます。それぞれに与えられた能力がありますが、能力の最大の神様のルールは忠実であることと心があることです。その二つはどちらも保たれていなければいけません。教会で私たちは、この忠実と心を学んでいるのです。私たちはその中で自らの心を取り戻すこと自らの置かれた場所で忠実に生きることの両立を養っています。子育ても同じです。子ども達に心を失わずに、且つ置かれた場所であって精一杯向き合うことを教えるのが親の仕事です。そしてそれは神様が私たちにしてくださっていることです。心の中心を学ぶことです。心を失ってはいけないことを伝え、置かれた場所であきらめずにやり遂げること、その場所で相手の人に与えること。それが一番大切なことです。

## ①愛のリレーション！！

神様との関係が本当に保たれて奉仕をすれば、すばらしいことが起こります。そこで大切なことが忠実ということです。この両方が大事なのです。あなたが神様を愛することは、神の命令を守ることです。教会にも社会にも秩序は大切です。社会は秩序が大前提で、裁くために秩序が用いられます。元は聖書からきた法律でしたが、今は秩序のための法律になってしまっています。礼拝もずれてきます。英語で「捧げる」とはSacrificeですが、

全焼のいけにえを捧げる等、あまりにも重いものでした。なぜこのようなことをするかというと契約は命がけだからです。誓いを破ると言うことは血で贖うという約束だからです。しかし神様は最初人を作ったとき、礼拝を作ったとき、あなたを燃やし、清くするためにつくったではありません。だから人々の価値観がDevotion(献身や出家の意)に変わっていきまふ。そしてCommittment(約束・信頼)に変わっていきます。宗教はこのどこかにおさまっています。これはキリスト教会でも根強く残り、本来の主旨から逸脱していきまふ。では元は何かと言うと「コルバン」です。(ミトカレブというヘブル語からきて、神様と人との関係であり、関係を持つと得ると言う意味)神様の前に出るの、受けることです。そして私たちの心の内側の重荷を出すのです。それが礼拝の原点です。「神様、あなたにすべてゆだねまふ。」そんな思いで、神様に自分の心をさげ出すのです。そのことがローマ人への手紙8章20節に書かれています。そこには、人生でむなしさがあるなら喜びと言われています。問題があるなら望みを置きなさい。あなたは祈られています。折にかなった助けを与えてくださいます。それはあなたが神様のところへ出て行くためです。

## ②パッションに生きる！！恐れてはいけない！！任されたことを心一杯！！

今あなたが任されていることは何ですか。置かれた場所であつて、神様があなたをそこに植えられたのだからやめなさい。意味があります。渡辺和子さんが言われていたように、置かれた場所であつて生きているのはこういうことです。柔和とは、置かれた場所であつて生きていること、それをパッション(情熱)でやらなければなりません。イエス様は十字架に向かうことに情熱をかけました。人には役割があります。各々タラントをその人に与えたとおるよう、その人に与えた賜物なのです。この体はキリストの体であつて、すべての人はその各器官であつて、すべては必要なのです。置かれた場所であつて忠実に心をもって行わなければなりません。森村一左衛門さんはなぜクリスチャンになつたかと言うと、忠実に作業をしているフランス人の姿を見たからです。愛の忠誠心が人の心を変えたのです。

## ③帰ろう 自分を下ろそう

人々の心を変えるのは神様です。どんな人も最初は人を通して何らかのきっかけで教会に来まふ。教会で出会う人にあなたの心を伝えてください。そこから成長して神様の姿に向いていきます。神様のところへ帰ろうとすると変わっていきます。イエス様が生まれて60年経つたころ、ローマ帝国で大火災が起きました。国民はネロが町に火を放つたと言いまふ。するとネロがキリスト者たちが放火したと言いまふ。そのため、コロッセオの中に入れられ、殺されました。キリシタンは迫害を受け、殺されたのです。そんな中で「あきらめるな、かならず神様の安息がある。」というヘブル人への手紙が書かれたのです。命がけのメッセージです。私たちの心の中にはさまざまな思いがあつて、これが正しいと思うものがあります。それを神様の言葉は最善に変えてくれます。今まで正義で学んできたさまざまな言葉を神様は、大胆に神様の前へ出ること、正しいものへ変えてくれます。望みが抱けない時、苦しみがある時、前を向けなさい時、痛い時、苦しい時、是非大胆に神様の前に出て行きまふ。それが礼拝です。それがなされた時、私たちの心は変わるのです。心が癒されると愛が賜物として与えられます。しようとするのが愛に根ざして行われます。無駄と分かつても出来るようになるし、裏切られても腹が立ちません。昔のキリシタンがなぜ殉教できたのか、それは神様に対する愛の忠誠心からです。愛されたから愛したのです。神様の前に出たから、愛されたことが分かつたのです。あなたが置かれた場所であつて、羊を牧して行きまふ。どう牧するかと言葉ではなく、生き様を見せることです。あなたが必要とされるのは、あなたが神様に向いているからです。神様はあなたに与えたいわけです。愛されたことを伝えたいのです。

(要約者:浅野 恵子)

(9月10日)